

研究環境基盤部会 大学共同利用機関改革に関する作業部会（第4回） ヒアリング資料

機関名 人間文化研究機構 国立歴史民俗博物館

<主な論点>

① 検証の進め方（資料2-1）について

「大学共同利用機関として備えるべき要件」に基づいてそれぞれの機関が特性に応じた独自の自己目標と検証の観点・指標を設定して自己検証することは、自己改革を進めるうえでは重要だと考える。あらためて言うまでもなく、大学共同利用機関は成立の経緯もミッションも研究のありかたも同じではなく、多様な在り方をしていることこそが重要で、それがこれまで大学とともに日本のすぐれた研究・教育体制を支えてきたのである。

したがって、組織としての、自己目標設定→「自己検証」は、本来絶対的評価となるはずであり、さらにしかるべき外国人研究者によって、自己評価設定→自己検証の過程そのものをフォローし、自己目標の到達度を評価するということによって、世界的にこの機関がどのように評価されているのかも合わせて確認できる。これを「自己検証による自己評価」とし、外部検証過程には、これが示されることになる。

科学技術・学術審議会では、6年間の計画が出された段階で、それぞれの機関の共同利用機関としての自己規定（備えるべき要件）に基づいて策定された自己目標・計画の妥当性について、それぞれの分野の研究者により評価目標の是非を判断し、承認できれば、6年目に「自己検証による自己評価」に対して、その到達度について判断するという外部検証となれば、機関の自己改革に資するものとなると思う。

ただ、多様な専門分野にひろがる大学共同利用機関について、今回示されたような主な観点と指標で一律に評価をおこなうことは困難であり、評価の指標については、各機関の特性にあわせて設定するか、もしくは選択制にすることを強く求める。そのようにすることにより、各機関が設けた自己目標の達成状況を適切にはかることができる。

また、外部検証にあたっては、各機関のもつ特性にあわせて多様な研究分野からの研究者を選定し、ピアレビューを行うことが望ましい。

検証の進め方とは直接かわらないが、実施主体の異なる評価がほぼ同時進行で行われることで、各機関の職員を疲弊させている現状について、今後どのように改善していくつもりなのか、その見通しをお伺いしたい。

毎年、評価し、それに応じて、運営費交付金からの留保分を分配するというシステムそのものの妥当性についての検証（自己評価）をいつするのか。その点についてもお伺いしたい。

② 主な観点（資料2-2）について

絶対評価としての自己検証を行うことが前提であり、かつ、それが尊重されるなら、この観点自体は概ね妥当だと考える。ただ、各項目で歴博をはじめとした人文系の機関にかかわって修正、追加すべきことを記す。

II 〈中核拠点性〉について

- ・ 大学における人文系の教育・研究環境が厳しい現状において、歴博（他の機関も同様かもしれないが）は、日本の歴史と文化に関する研究を推進するために必要な研究者、研究水準、研究環境等において先導的役割を担っており、我が国における中核的研究機関である。
- ・ 二つ目の○、学会、研究者コミュニティとの関係については、歴博にかかわっては、多様な学会、研究者コミュニティが存在し、「広義の日本史学」「日本学」であることを考慮してもらいたい（主な観点で示されている「国内外の研究者コミュニティが明確」とあるが、歴博の場合、それが多様だということ）。
- ・ さらに、この点でも、すべてにわたって、その研究分野の研究者によるピアレビューが不可欠であると考ええる。

III 〈国際性〉について

- ・ 「国際的な研究活動」→「国際的な調査・研究活動」としていただきたい。
- ・ 四つ目の○、外国人研究者・女性研究者・若手研究者とあるが、後二者が、〈国際性〉との関連で、ここに入る意味をご説明いただきたい。
- ・ 五つ目の○、「英語による職務遂行が可能」とあるが、英語にかぎらず、韓国語、中国語等の多様な言語への対応が必要と思われる。

IV 〈研究資源〉について

- ・ 「資料」→「学術資料」としていただきたい（指標についても同じ）。

③ 指標例（資料2-2）について

人文系に関しては、ここにあげられている数値目標的な指標例では、研究の質をはかることができないのではないかと恐れがある。また、その数値が「一人歩き」する恐れもある。

II 〈中核拠点性〉

- ・ 指標例としてあげられているものは、理系については有効かもしれないが、人文系の研究分野においてはなじまない。そこで、下記のことを追加していただきたい。
- ・ 人文系の学問のもつ特性を十分に踏まえた上で、指標設定をする必要がある。たとえば、共著論文の数、割合、TOP10%論文とあるが、人文系はそもそも、単著がほとんどであり、論文も重要だが、それらをまとめた著書の刊行が重要であり、最大の成果である。また、TOP10%論文に該当するものはない。理系の基準で人文系の研究成果ははかれないの

で、人文系の研究成果がはかれる指標を追加する必要がある。

- ・ また、随所に「国際」という言葉がありますが、歴博のように「日本の歴史と文化」といったいわば「日本学」の国際的な研究拠点であっても、その研究成果は、日本語を使った日本での研究が国際的に最高水準であり、まずは、日本において日本語で発表されて、はじめてその成果が評価される。このような「日本学」という学問領域の特性にあわせた指標の追加が必要である。
- ・ 研究の成果として、著書・論文だけでなく、展示（展示図録）・研究映像・資料集・調査報告なども、それぞれの分野に応じ、評価の指標に含める必要がある。

III 〈国際性〉

- ・ 国際的な研究活動の成果として、著書・論文だけでなく、展示（展示図録）・研究映像・国際的研究集会（シンポ・フォーラムなど）のほか、資料集・調査報告なども、それぞれの分野に応じ、評価の対象にする必要がある。
- ・ 「国際的な研究活動の状況」に、「国際共同展示」を加えていただきたい。
- ・ 英語にかぎらず、韓国語、中国語等の多様な言語への対応が必要と思われる。

V 〈新分野創出〉

- ・ 評価指標は、「TOP10%」など適用できない指標が多い。人文系の特性にあわせた評価指標の追加が必要である。
- ・ 論文数や国際共著論文数などでカウントできるものはあるが、そもそも個人の研究として公表されるものが多いので、ここでも個別のしかるべきピアレビューが必要である。

④ 機能別分類（大型設備・データ・情報基盤）の観点（資料3別添）から、自己検証をする際に留意すべき点

- ・ 大型設備・データ・情報基盤の3つに分類した理由と、その具体的な内容について説明してほしい。
- ・ データに学術資料は含まれるのか。その価値を強調すべき。「要件」にあわせて〈学術資料・データ〉とすべきではないか。
- ・ 博物館をもつ歴博の特徴を評価するような機能分類（博物館機能）を加えてほしい。